windy angel

煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Windy angel

【コード】

N5550L

【作者名】

煉

【あらすじ】

クトゥルフ神話を使用した
悲恋短編。

「さて、今日も仕事終了」

巨大な鎌から血を拭い取る。現れる刃に返り血を浴びた自分の顔と、赤い月が写った。顔にかかっている血を乱暴に手で拭う。完全には取れていないが、シャワーを浴びればいいので気にしない。鎌を手から瞬時に消し、明かりが点いていない灯台を後にする。

本来ならばこれで帰ったら寝れるのだが、今日は何故か幻夢郷の最上階である指令室へ来る用に言われていた。今の戦闘でぐしゃぐしゃになった髪を結び直す。近くに立てかけてあったスケートボードを手取る。随分使いこんでいるらしく、至る所に傷があった。地面に落としその上に乗る。右足で助走を付け幻夢郷へと向かう。

しばらくして巨大な塔にも似たビルの前に着く。スケートボードから飛び降り、入り口に居る男へIDカードを見せると中へ入る。中は月明かりしか明かりが無く狭い。一直線に進みエレベーターへ乗る。エレベーターには眼鏡をかけた男性が本を読みながら立っていた。

「おかえりなさい、賀川」

背後からの声に賀川雅紀は振り返った。いつの間にか手に本は無く、ニコニコと笑いながら雅紀を見ている。雅紀は何でも見破っているような余裕のある男性が苦手だった。

「長谷部さんも指令室に用ですか？」

雅紀の言葉に答えず長谷部冬哉は眼鏡を中指で上げた。それを肯定と取り再び前を向く。

エレベーターが最上階に到達し二人は廊下へ出た。赤い絨毯が敷き詰められた廊下を並んで歩く。廊下に二人の足音が響いている。もうすぐ夜明けの筈なのに窓から見える空は暗い。

二人は巨大な扉の前まで来た。冬哉が制服のネクタイを結び直す。結び終えたのを横目で確認し扉をゆっくり押し。重く低い音を立て

ながら扉が開いていく。雅紀が開けている横を通り抜け、まず冬哉が中へ入った。続いて雅紀が入り扉を閉じる。いきなり明るい場所に入ったため目を開けていられない。雅紀は慣れるまで手で影を作る。二人の視線の先には純白のドレスを身に纏い優雅に座っている女性が居た。幻夢郷のトップ。傍らには白のスーツを着た男性が直立不動で立っている。

「この度お二人に来て頂いたのは、次世代のクタニドをお迎えに行つて頂くためです」

傍らに居る男性が淡々と言う。二人の目が見開かれた。クタニドとは、幻夢郷のトップ。今、目の前で優雅に座っている女性がそれである。しかし、女性は既に三十路を過ぎているため戦う力は残っていない。そのため、クタニドは世代交代を要する。そして、新たなクタニドを迎えるという事は本格的な戦いが始まるという事を意味している。今まではクタニドが今の女性でも苦戦などはしなかった。雅紀が一人で灯台へ赴き戦ったのが証拠である。

「クトウルーが覚醒したのですか？」

冬哉は片膝を絨毯に付け頭を下げたまま聞く。女性はゆっくり首を横に振る。気配でそれを察し少しだけ安堵する。クトウルーは敵側のトップ。幻夢郷で言うクタニドである。

「覚醒するまではまだ時間があります。しかし、新たなクタニドに戦う術を教え終わるまで覚醒しないとは限りません。なので早めにクタニドを教育する。と言うのが、クタニドのお考えです」

男性はゆっくり二人へ歩み寄り写真付きの書類を渡す。頭を下げながらそれを受け取り立ち上がる。

「頼みましたよ。賀川、長谷部」

男性の言葉に深く頭を下げ二人は部屋を後にした。写真に写っている少女は幸せそうに笑っている。雅紀はその笑顔に表情を歪ませた。その少女は雅紀の幼なじみであり、密かに思いを寄せていた相手でもあった。

「私情を挟んだらこの世界は一瞬で滅びますよ」

「わかってますよ」

雅紀は写真を握り締め壁を力任せに叩いた。分かってはいた。少女が次世代のクタニドになる事を。が、いざその時になるとどうしようも無い感情がこみ上げてくる。

*

「……結局、クトウルーを封印しやがって」

崖の上でポツリと呟く。左肩を強く握った。長袖を着ているのに左腕部分は風で揺れている。風が収まり波の音だけが響く。海には花を咲かせた桜の枝が浮いている。

「封印したのは誉めてやるけどな、お前が死んでどうすんだよ。バ
ーカ」

下唇を強く噛み締める。崩れるように地面へ座った。雅紀の後ろには小さな墓石が立っている。そこには小さなペンダントがかけられている。それは雅紀が一人で選り少女へ贈った最後の誕生日プレゼント。

『雅紀！ 一生大事にする！ あの世まで持つてく』

嬉しそくにそう言った彼女。翌日、覚醒したクトウルーを命と引き換えに封印した。込み上げる涙を我慢せず嗚咽と共に吐き出す。

その時、一筋の強い風が吹きペンダントが空へ舞い上がる。

『忘れ物取りに来た。ありがとう、雅紀』

風がやむ。雅紀は立ち上がり涙を乱暴に拭う。そして海に背を向け歩き出す。

『何度でも無くしたり忘れた時は持つてきてやるよ。俺はお前の
拳を作り空へ掲げた。』

「俺はお前のパシリだからな
風が吹き拳を優しく撫でた。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5550/>

windy angel

2010年10月21日22時58分発行